幼児とオリンピック遊び

鈴木正子

ある子どもは兄姉たちと沿道で、ある子どもはビルの屋上から、またある子どもは父親の肩車にのって自分たちの街にやって来た聖火をみることができた時、幼児たちは初めてオリンピックを身近に感じたようだった。

「先生！　きれいだったよ」「しゅーっと燃えて走って行った」「赤い火がけむ（煙）出していた。だけどすぐ行っちゃったんだ」

翌日子どもたちはこんなふうに聖火のことを話し、早速絵にかいてみせてくれた。

それから日を追うにつれ、子どもたちの遊びの中にオリンピックの影響がみられ始めたのである。世紀の祭典とも言えるオリンピックを迎えるについて、教師側はどういうふうにして幼児たちにそれを受け取らせていったら良いか、ということについてずいぶん前から心をくだいていた。

テレビも見せよう、万国旗も飾ろう、絵もかかせたい、ごっこ遊びもしよう。それだけではなく本当のスポーツマンシップと言うものを幼児なりにわからせたい。また世界にたくさんの国があることを知らせたい。そしてみんなが仲良くしていくことのよろこびも、などと。しかし日がたつにつれて、幼児たちの関心は教師の指導をまつまでもなく、自然に高められて行ったのである。そして幼児たちはその感慨をいろいろな表現で遊びの中にみせてくれたのである。

今日はオリンピックが幼児の心に残していった足跡を、あそびの中から拾い、私のクラスの記録としてまとめてみようとおもう。

――○オリンピックの絵○――

まず幼児たちの絵の中から、オリンピックを主題にしてかかれたものを拾ってみよう。幼児たちのオリンピックへのあこがれや感激が、良くわかるからである。

聖火リレーの絵は個人個人でかいたものでクレヨン画である。あとの絵は四人または五人のグループによる合作で、大きな模造紙に絵の具でかいたものである。どれも五才児の作品である。実際のものを見てきた幼児が、いくらか色について意見を申しのべていたようだったが、ほとんどがテレビの印象と、たくましい想像力からうまれたものである。

1　聖火リレー

十月五日、まちにまっていた聖火が前橋市にやってきた。ほとんどの子どもが見に行ったらしく良くかいた。全部ここにあげられないのが残念である。

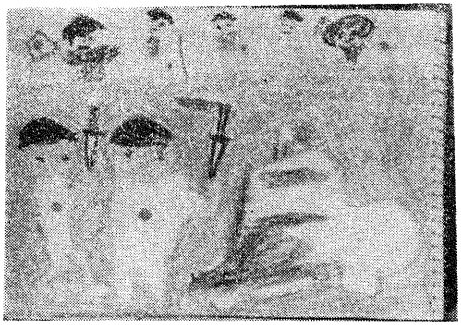
2　国立競技場

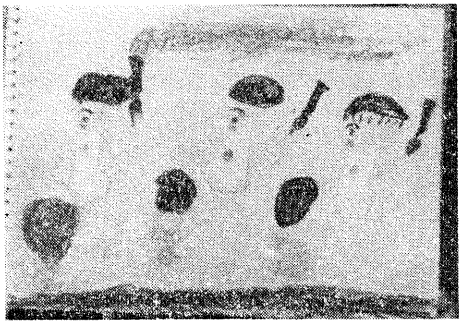
赤と緑でかかれているグランド、黒で力強くひかれたライン。聖火を持った最終ランナーが今競技場の入口に見えたところである。

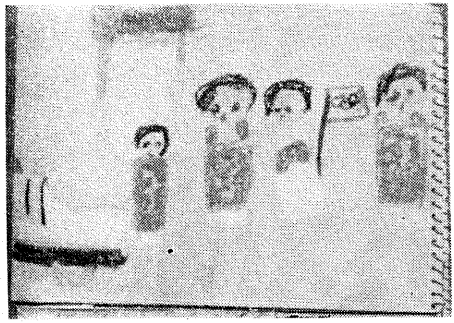
3　水泳の表彰式

大きなオリンピックの五輪をかこんで、顔、顔、顔、良く見る

1. 聖火リレー

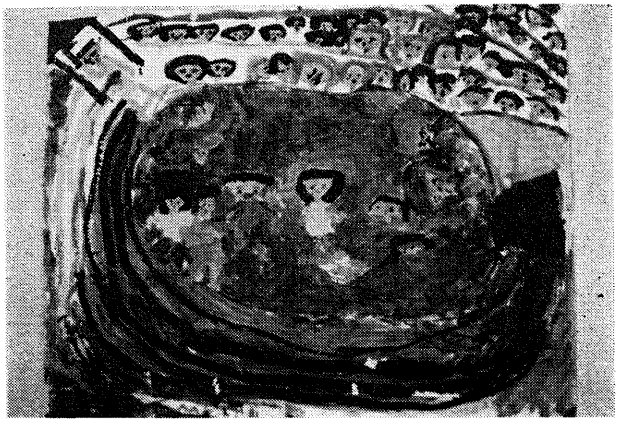




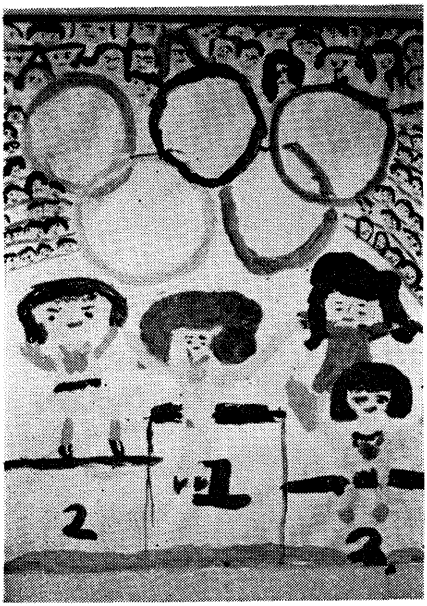


と髪の毛の黒い人と茶色の人が仲良く入り交って、国際色にぎやかな見物席である。中央の1の表彰台にはアメリカ選手、2と3は日本選手、幼児もさすがに水泳は日本を一位にしなかったが、どの選手ものびのびとかかれていて楽しい。プールの水

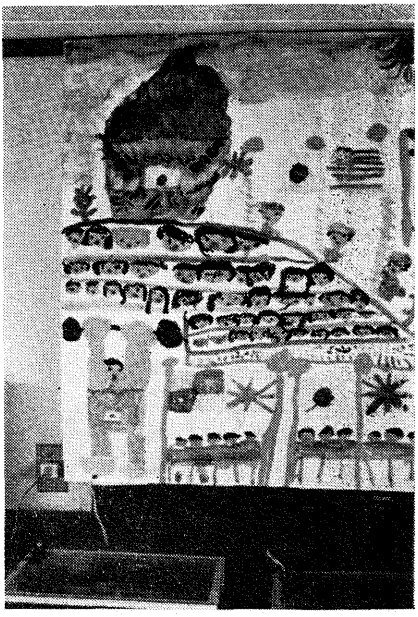
2. 国立競技場



4. 重量あげ



3. 水泳の表彰式



の色が白の多い画面をちょっとひきしめている。

4　重量あげ

重量をあげているのは日本選手で、そばにすわっているのは審判である。

青空に聖火が真赤に燃えて各国の旗があがっている。見物席にはまたしても黒や茶色の髪の人の顔がいっぱい。白や黄色の菊の花も咲いている。誇らしい日本の重量あげの姿である。

――○体操競技ごっこ○――

次にごっこ遊びについて記しておこう。オリンピックも後半に入り、日本の得意種目の体操が始まった。幼児たちの話題も自然にテレビで見た日本選手の活躍などでにぎわうようになってきた。

ある朝のこと、遊戯室にいくと箱積木を重ねて数人の子どもたちが表彰ごっこをしているのにぶつかった。聞いてみると体操の表彰式だとのこと、あまりおもしろそうなので、今日はこの遊びを、みんなの遊びに発展させてみようとおもった。「先生もみんなも入れてね」と言うと、気持ちの良い「はーい」と言う返事がはね返ってきた。気の早い子どもが他の子どもたちに知らせに走る。私は集ってきた子どもたちと一緒に、平均台やとび箱やマットなどをならべることにした。遊戯室にそれらを配置すると何となく競技場らしくなった。その頃には全部の子どもたちが集まり色旗などもそろった。

選手村までできて保育室から移動したままごと道具までならべられた。見物人と選手と審判官と係員と四つの役ができて、私がピアノを弾くことになった。

平均台、とび箱、マットの順に競技をおこなうことになり、みんながそれぞれの場所にわかれた。

ここで私は幼児たちと運動のしかたを、よく約束することにした。

平均台は両手を横にあげて渡る。おりる時はひざをまげるのを忘れないように。とび箱は走って行ってまたぐ。マットはどんぐりになってころころころがること。私は毎日子どもたちがあまりにすばらしいものを見ている関係上、それを夢中で真似をしないように、危険防止という意味からとくに安全なやり方をえらんでみた。選手たちの演技を毎日見ている幼児たちはちょっと物足らなそうな顔をしたが、実際やってみてなかなかそれすらも自分のおもうようにできないことを知ったようだった。

男児は断然日本チームになることを希望したが、どういうわけか女児はアメリカチームになりたがった。幼児の希望どおりにチームをわけた。次にピアノに合わせて選手入場、見物人も拍手をして、すべてこの辺は本物のとおりだった。審判官の呼び出しで選手たちの演技が始まった。

審判はそのたびに大きな声で、九・五とか、八・五とか点数をよみあげ、それだけでは物足らないらしく、黒板に数字を書いてくれと言ってきた。

「着地が悪いから減点だよ」となかなかきびしい審判ぶりだが、割合にたしかな評価をするので感心してしまった。そして黒板に書かれた記録によって、ひとつの演技が終るたびに表彰式がおこなわれた。

メダルは園児札が早変りして、役員の手から選手の胸に、その幼児たちのまじめな顔。そばに立っている子どもが旗を高々とあげて振る。風になびいているところなのだそうである。そしてそれに合わせて君が代やアメリカの国歌のメロディがくちずさまれた。

私たちはこんなふうにして時間のたつのも忘れて遊びつづけてしまったのである。

その日――子どもたちが帰ったあと、私はこんなことについて考えさせられた。

それはあんなにもおもしろく遊ぶことのできた今日の体育あそびへのオリンピックの影響についてである。今日の幼児たちの体育あそびは今までになく熱の入ったものだった。どの子もどの子も約束したやり方を守り一生懸命にやることに心をくだいていた。

幼児たちは幼児なりにオリンピックをとおして、体育遊びのたのしさを知り、一生懸命になることがどういうことかということを感じとったようである。それから日頃あまり運動に親しむことのできない幼児まで選手になって参加し、よろこんで平均台やとび箱やマットあそびを経験できたこと、これがきっかけできっと運動の好きな子どもになってくれるだろうという二つの大きな収獲についてであった。

――○おしまいに○――

ここに私は心に残ったふたつの遊びを取り上げてみたが、この他に子どもたちは万国旗を飾ったり、テレビを見たり、話合いをしたり、前橋で行なわれた聖火リレーのスライドをみるなどいろいろな遊びをした。

そしてそれは初めにも書いたとおり、教師が最初計画したものなどよりも、もっともっと豊かに展開していったのである。

それは幼児をとりまく日本中の人たちが関心をしめしたということもあるだろう。けれどなんといっても日本選手をはじめとして国境を越え各国から集まった選手たちの立派なプレイぶりをみることにより、自分の全力をつくして一生懸命に生きるということのすばしさを、幼児なりに受けとることができたからではないだろうか。

また、各国からのお客さまが日本に集まることができた平和のよろこびが、幼ない心をゆすぶったからではないだろうか。

オリンピックはそういう意味で幼児の心の大きな糧になったとおもう。

過ぎ去ったオリンピックをふり返り、私はしみじみと、日本でオリンピックを行なうことができて良かったとおもうのである。

（群馬大学附属幼稚園）

井上範子

四年に一度というオリンピックが東洋で、しかも東京で開かれるというので「すべてはオリンピック」というように騒がれた東京大会も無事に、しかも成功裡に終り何よりだったと思う。そしてオリンピック一色にぬりつぶされた日本もようやく落ちつきを取りもどし、本来の生活に立ち返ろうとしている。この時、私たちはオリンピックが子どもたちの生活の中へいかに浸透していったかを静かに反省してみたいと思う。

幸か不幸か私の園はちょうど創立十周年に当るため運動会を春におゆうぎ会や絵画製作展などを中心とした記念行事を秋に行なった。したがってオリンピックをみてのもり上った気分での運動会というものがなかったが、オリンピックはカラーテレビでと幼稚園でもカラーテレビを二台取りつけるなどしたせいもあってか、オリンピックの子どもたちへの影響は著しいものがあった。私たちもできるだけカリキュラムの中にもりこんで日々の保育を行なうことにした。その結果の主なものをあげてみよう。

一、保育の中でとりあげたオリンピック遊び

(1) 旗作り

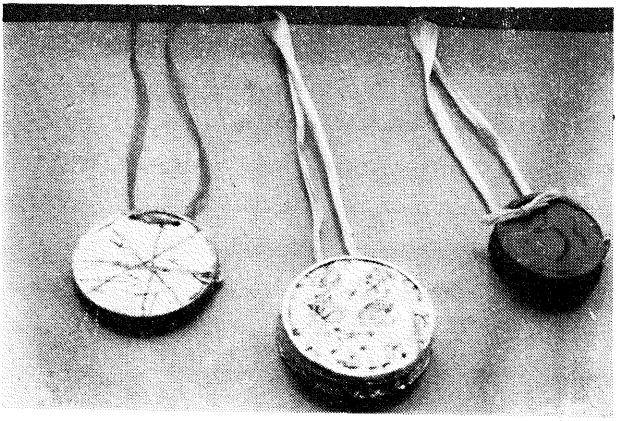
まずいろいろな国の旗を作って飾ることになり各自がクレパスや絵の具、マジックで旗を作り紐にはりつけて各国の旗を作った。作りながら自分の作っている国についての自慢話やその国よりこっちの国が強いんだなどと強さくらべをしたりして楽しそうだった。各国の旗は競技場の周囲に立てるのだから紐につけるのでは違うといい張る子もありたいへん無理があったが部屋の周囲にはりめぐらすということで納得してもらった。(これには相当困った)

(2) メダル作り

勝った人には金・銀・銅のメダルを渡すんだといっていろいろな

子どもたちの造った銀・金・銅メダル

（すべてあきかんのふたで造ったもの）



材料で工夫してメダル製作をした。自分が金メダルをもらったような調子で作っていた。あきびんのふたや厚紙に紙をはって穴をあけリボンを通したすばらしいメダルがたくさんできた。

(3) プラカード作り・聖火作り（トーチ）

プラカードは板きれや、紙・棒で作るというのが圧倒的だったが、適当な大きさの材料が手近に揃わなかったのでスタイロフォームがあったのを与えてみた。スタイロフォームにマジックで国名をかき、上からシンナーでなぞっていき細い竹棒を突きさすという簡単なものなので喜んで納得し製作した。

また聖火については、どうしても煙や炎がほしいらしく、筒を作って火をつけてもいいかとまでいい出した子もあったが「それは危ない、走る人の手に燃え移ったらやけどするやないか」ということ

戸外での聖火リレーごっこ

（トーチの炎が小さくて残念です）

になり、火をつけるのは止めて紙で炎をはりつけたのや、テープをひらひらさせたりするのにとどめた。

(4) オリンピックごっこ

A 聖火台への点火 オリンピックゲームを取り扱う頃教育実習生がきており、聖火の点火について苦心していたが結局、大きい紙にかいた聖火台をきり抜き箱にとめ、点火と同時に炎の作りものを置くというやり方に終ったがそれでも結構喜んでやった。私は後で、聖火台に赤いランプやドライアイスを仕掛けるととても真にせまったものになると思ったりした。

B 水泳 部屋の床にコースラインをかき、背泳、自由型、リレーなど、水のないことなど一向気にせず元気一杯で泳いだ。いや這った。見ている側も予めきめておいた国名でもって、「イギリス頑張

水泳 ○○○自由型

ボート フォア

立巾跳　（審査員のしるしのつけ方が違うと、早速横から注意しているところ）

れ！」「日本頑張れ！」……の応援でたいへんなにぎやかさだった。

C　ボート　水泳の時と同様コースをきめておしりですべるフォアは微笑ましい風景だった。中には「先生エイトいうのがあって八人でするのもあるよ」と教えてくれる子もいた。

D　巾跳　普通よくやる立巾跳でやらせたが、審判員がうっかりして動いた方の足に印をつけようものなら応援の観客にまわった子たちの鋭い目が全然承知しないという一幕もあったりした。

E　その他　オリンピック種目に直接関係ないが頭の上に空かんをのせて歩くとかボールころがしのようなことをやらせたりしたが、これも喜んでよくやった。

F　表彰式　これらの競技はすべて個人的に表彰するのでなく時間の都合上国別団体総合優勝という方法をとったので全体の得点が一番多い国を一等とした。したがって一等をとった国のグループに金メダルを渡した。二等の国のグループに銀メダルを渡したため銅メダルをもらった元気のいい男の子が真赤な顔をしたと思ったら「ぼく一生県命頑張って一等とったのに銅メダルや」といってワーワー泣きだした。そのゲームをさせていた教生は個人でなく国の対抗だとなだめたがくやし泣きがとまらず困っていた。すると一人の男の子が出てきて「ぼく三等だったけどぼくの国が一等になり金メダルをもらったからかえてあげる」と言い出しさっさと交換していった。するとぼくも、わたしもとまるで泣いた子をあやすようにたくさんの子が申し出て金メダルを首にかけてやり一応けりがついた。ある教生は年少組で全員に金メダルを渡したが子どもの方は別に何も言わなかった。多少方法は違うにしてもこの時程年令の違いを感じたことはなかった。

二、子ども同志の中で自然にみられた遊び

このように教師と一緒になっての保育の中でのあそびを経験した子どもたちは、子ども同志の自由なあそびの中でも非常な発展をみせ「オリンピックごっこするものこの指たかれ」と友だちを集めてはいろいろなゲームをやっていた。中でも最も好まれるのは単純な個人フレーで勝負がきまるものを好んでやっていた。即ちかけっ

こ、水泳、ボートなど、レスリングもたくさんの金メタルをもらったので人気があったが、先生のみていない時は危ないから禁止しておいた。また重量挙げなどはいままでおとなの間でも余り知らなかったものだが、金メタルの影響でよくまねていた。まねて最も喜ぶのは聖火リレーごっこだった。自分で作ったトーチをもって得意そうに走り、他の子は日の丸の小旗をもってこれに続き、園庭を何度も一周しては点火のまねをし、しばらくは階段をかけ上りたがって困った。トーチのない子は急いで作ったり、また庭に落ちている木の葉や、中には手箒をさかさまにもつたりして大勢の子どもが一群となって走っている姿がみうけられた。最近は気温が下ってきたのでかけずりまわるサッカーなどを喜んでよくやっている。またこうした活動的なあそびの一面、静的なあそびを喜ぶ子たちの間で、いつもはお人形や船ばかりかいている自由画帳の一頁一頁に各国の国旗をまねてかき、これは何という国と得意そうに説明してくれたり、メタルを作ってはメダル屋さんを始めたり、しばらくはオリンピックの余波をうけての活動が非常に活発だった。また問題になった表彰もごく自然に積木をもってきて表彰し合い、おりてくると空かんを口の所にあてがって「優勝の御感想は」といった茶目っぷりもみられた。

オリンピックで得たもの

このようにオリンピックをみて子どもたちの活動はおとな以上に積極的で、何からでもどんどん吸収していく態度が強く感じられた。「いいな」「おもしろいな」と思ったことはすぐまねて身体でやってみて楽しむという、幼児の楽しい無邪気な生活をみていてうらやましく思われた。これを機会に幼児なりに世界への目をむけさせよう！スポーツへの関心を高め、よりスポーツを愛好する子に育てよう！といろいろ欲ばったことを考えていたが、思ったよりもはるかにその目的を達することができた。指導要領の中の「国旗に関心をもたせる」ということなど今年は労せず効果をおさめた。よく似た旗があって言い違えると直観力の鋭い子どもの方では、はっきり違いを指摘するなど国旗博士まで生れた。暇の折に地球儀を持ち出してその国の国旗や国民についての話などむつかしいこと、知りつつ、話してやった所、未知のものへのあこがれからか目を輝やかせてきいてくれた。逆に新興国の国名をいって「どんな所、どんな人がいるの」ときかれ、はて、そんな国どこにあるのかなとあわてて勉強するということもあった。また、表彰式の時の教生の先生でもろくに弾けない他国の国歌をさぐり弾きで弾いてのける愉快な表彰風景もみられた。

ともあれオリンピックは幼い子どもたちに多くのことを与え、多くの経験を楽しくさせた。とかく頭でっかちな知識方面にのみ気を奪われがちな今日、この機会にスポーツを通して大いに身体を鍛え心身共にたくましい生命力のある子どもたちに育てて行きたいものだと思っている。

（高松幼稚園）